

---

# IS ~ もう一人の操縦者 ~

零裂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 〜もう一人の操縦者〜

### 【Nコード】

N4650W

### 【作者名】

零裂

### 【あらすじ】

IS学園に友人である織斑一夏と入ることになってしまった少年、四条友歩の物語が始まる！……のか？

注意：原作ブレイクあり。文章の練習作。不定期更新。超鈍亀更新。

## 四条友歩とIS学園

新たな学校生活の初日。そのことについて考えることは一般的に沢山ある。それはこれからの輝かしい日々への期待や、はたまた自分の日常の変革についての不安など色々あるだろう。

だが今ボクの頭の中を埋め尽くしているのは、一つだけだった。

「視線が痛い……」

思わず口からぼそと呟きが漏れてしまったが、仕方ないことだ  
と思いたい。

なぜならボク以外の生徒が一人を除き 全員女子なのだから。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHR始めますよー」

そう声を上げたのは我がクラスの副担任、やまだまや山田真耶先生。

黒縁眼鏡をかけてにつこりと微笑んでいる姿を見ると、生徒のようにも思えてしまう。服がだぼつとしている上に眼鏡のサイズが若干大きいこともそれに拍車を掛けている。

眼鏡をかけているところに親近感が少し湧く。ちなみにボク  
の眼鏡はれっきとした度入りである。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」  
「……………」

山田先生の挨拶は誰からも反応がない。この教室の妙な空気が原因だろう。多分。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

先生がかなり慌てているがそっちに気を割く余裕はない。席が最前列なのでクラスメイトの注目度がヤバイ。右隣の席である親友ありむらいちかと織斑一夏よりはマシなのだろうが、やはりこの学園では『男』が非常に珍しいようだ。

一夏がこちらに目を向けた。正確にはボクと、幼なじみの篠ノ之しのの箒ほづきに助けを求めるような視線だったが、目をそらしておいた。

いや、ボクも困ってるし他の人を助ける余裕はない。

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

どうやら先生の声でびっくりしたようで声が裏返っていた。他の女子もくすくすと笑っている。

かくいうボクも先生の話聞いていなかったたので人のことは言えないのだが。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってるかな? でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ごめんね? 自己紹介してくれるかな?」

一夏に山田先生がぺこぺこ頭を下げていた。というか山田先生が低姿勢すぎてどっちが先生か分からない。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていつか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「本当ですか? 本当ですね? や、約束ですよ。絶対ですよ!」

一夏の手を取って詰め寄る山田先生。そしてものすごく注目を浴

びている。年頃の子が放つ視線の圧力は半端じゃない。視線が攻撃力を持っているんだったら一万はあると思う。基準は知らんけど。そして一夏が生徒側を向く。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしく願いします」

頭を下げる一夏。え、まさかそれだけ？　ボクはともかく他の女子の視線がヤバいぞ。『もっと喋ってくれないの？』みたいな雰囲気全開だぞ。

言うことがなくて、冷や汗を流しているように見える。少ししてから一夏が再び口を開いた。

「以上です」

女子が何人かずっこけた。しかも、え？　ダメだった？　みたいな顔をしている。

パアンツ！　凄まじい音が一夏の頭から響いた。

黒のスーツにタイトスカート、長身で狼のような鋭い吊り目の美人。一夏の姉である織斑千冬おりむらちふゆがそこに立っていた。何の仕事をしているのか聞いても教えてくれなかったが、IS学園の教師をやっていたのか。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

千冬さんが優しい声を出している。うん、ボクも滅多に聞かないような優しい声だ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出

来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが私の言うことは聞けいいな」

素晴らしいほどの俺様発言が飛び出した。もはや、ここ軍隊じゃね？

「キャ　　！　千冬様、本物の千冬様よ！」  
「ずっとファンでした！」　「私、千冬様のためなら死ねます！」

ここは軍隊じゃなくて宗教団体だったようです。最初の方の沈黙が嘘だったかのように騒がしい教室内で、千冬さんは女子達を鬱陶しそうな顔で見渡す。

「毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

いえ、どのクラスでも騒ぎになります。多分。

「きゃあああつ！　もつと叱って！　お姉様！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

皆さん楽しそうですね。そしてこれがボクのクラスメイトかあ…  
…。

「で？　挨拶も満足にできんのか、お前は」　「いや、千冬姉、俺は」

パアンツ！　一夏は今日だけで何回叩かれるんだろ。二桁に届

かないかなあ。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「まったく、お前という奴は……まあいい。四条。お前も挨拶してみろ」

「ここでボクにキラーパスが飛んできた。え？ 『お』の次に『し』  
っておかしくない？」

「なんでボクなんですか！？」

「お前も同じ男子だからだ。さっさとしろ」

「当分順番が来ないとタカをくくって何も考えていない。くそ、はめられた。」

席を立てて後ろを振り返れば物凄い視線の圧力。さらには千冬さんの眼力がこちらを睨みつけている。目からビームが出せるんじゃないだろうか。

「……四条<sup>しじょう</sup>友歩<sup>ともほ</sup>です。趣味はサボテンの飼育と株分け」

「パンツ！ ボクの頭が衝撃で少し下がり、遅れてとんでもない激痛がマイヘッドを襲った。」

「ぐあっ！？」

「自己紹介で嘘をつくな馬鹿者」

「親しみやすさを重視したボクの意外性は否定されたようだ。」

「改めて考えれば自己紹介で意味のない嘘をつくとか、バカ確定の行為である。」

「えー、趣味は将棋と読書。好きな食べ物は辛いもので、嫌いな食べ物はトマトです。皆さん一年間よろしく願います」

正しい自己紹介と共に頭を下げる。頭を上げれば、大多数が歓迎してくれる雰囲気で拍手してくれている。一応は成功と見ていいだろう。

隣の一夏は苦笑していたが、問題はない筈。そう自分に言い聞かせ残りの女子達の自己紹介を聞き流す。こんな人数の自己紹介を覚えられるワケがない。これからの学校生活で覚えていこう。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

相変わらずの鬼発言っぷりだが口を挟んだりもしない。ていうかしたくない。

「あー……」

隣で一夏が呻いている。ボクも同じ気分だけど、これは正直なめていたと言わざるを得ない。



今は一時間目の授業が終わった後の休み時間。それだけなら全く問題はない。初日から授業なのは勉強大嫌い世界代表であるボクとしてはいただけないが、まあそれもよしとしよう。

廊下にはたくさんの女子がいる。見たところ上級生もいるようだが。

IS学園は世界で一つしかない。が、それに反してISについての勉強を取り入れている学校はかなりの数がある。ISは通常、女性にしか使えないものだ。つまりISの勉強をしているような学校は女子校なのである。ここにいるような女子は女子校から進学しているものが大半だろう。当然、男子への免疫なんてほとんどないに等しい。

結論を言うと興味津々の女子達からの視線や雰囲気キツイ。

IS。正式名称は『インフィニットストラトス』。宇宙での活動を想定して作られたマルチフォームスーツであり、最初は兵器として、現在表向きにはスポーツとして扱われている。兵器としての開発は今もされてるらしいが。

ISには欠陥がある。『それは女性しか使えない』ということ。ボクは藍越学園という学校を受験するための試験会場で、一夏と二人で道に迷った。間違えて入った部屋の中で間違えてISに触ってしまった起動させてしまった。

まあ、ボクと一夏は例外として、重要なのは女性にしか使えない兵器であることだ。そしてISは　すこぶる優秀な、優秀すぎる起動兵器だった。現行の兵器はISの前では鉄くずも同然と化し、世界の軍事バランスは呆気なく崩壊。

ISの開発者は日本人。つまり日本はIS技術を独占していた。危機感を募らせた諸外国はIS運用協定　『アラスカ条約』によってISの情報開示と共有、軍事利用の禁止などが決められた。

こうなるとIS及びその操縦者は国の軍事力に直結する。各国は率先して操縦者　女性を優遇する制度を施行し、『女は偉い』という認識が世間に浸透。結果、女尊男卑社会の完成である。

長々と語って何が言いたいかというと、対等な立場の『男』に女子が無駄に好奇心を湧かせているということ。

「なあ友歩。この場所にいるだけで俺の精神力がどんどん減っていくんだが」

一夏から話しかけられた。この空気の中でよく口を開けるものだ。ありがたいけど。

「ボクも同じ気持ちだよ。でもさ、二人いるからまだマシになってない？　これが一人だったらと考えると……」

そう返すと一夏の顔は若干青ざめたように見える。ちなみにボク一人だったら逃亡の可能性も大いにある。

「……そうだな。お前がいてくれて助かったよ」

「その気持ちは有り難く受け取っておくよ」

やはり、一夏はいい奴だと思う。感謝の念を感じても口に出せないって人も多いけど、昔から一夏はそういうことは素直に言っている。

「……ちよつといいか？」

「ん？」

「え？」

聞いたことがないけどどこか懐かしい声がした。そちらを向くと六年前によく遊んでいた幼なじみ　篠ノ之箒がいた。ポニーテールに強気そうな目つき。身長は平均ぐらいだと思いが、身に纏う鋭い雰囲気は実際より高く思わせる。

「友歩、一夏を借りてもいいか？」  
「どーぞどーぞ」

ボクと一夏と箒は幼なじみだがその頃から箒は一夏を好きらしい。  
言動を見てればすぐに分かる。  
なのでここは氣を使う。

「廊下でいいか？」  
「あ、ああ」

二人は連れ立って教室を出て行った。……廊下に出ても余り意味はないと思うが、そんなものは教室でも一緒である。  
だがこうなってしまうと必然的に教室内の男子はボク一人。視線の重圧から逃げるために小説を取り出して、読み始める。  
結局一夏達が戻ってきたのは二時間目の開始直前だった。

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

山田先生の声が朗々と教室に響き渡る。  
隣の一夏はどうやら授業内容が全く分からないらしく、オロオロ

している。その様子に気付いた山田先生が一夏に声を掛ける。

「織斑くん、何か分からないところがありますか？ 分からないところがあつたら訊いてくださいね」

「えー、ほとんど全部分かりません」

「ぜ、全部……ですか？ えっと、四条くんはどうですか？」

「またもやキラーパスだがこの手の質問がくるのは予想済み。解答ももちろん用意してある。」

「このレベルの授業なら余裕で」

そこまで聞いて安堵の表情を浮かべる山田先生。

「分かりません」

自信満々の表情で言い終えると山田先生の顔が引きつっていた。

「わ、分からないんですか……？」

「はい」

そこで教室の端に控えていた千冬さんが声を挙げた。

「織斑、四条、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「勉強しなくても大丈夫かとタ力をくくっていました」

スパパアンツ！ またもや出席簿が火を噴いた。脳細胞が死んでボク達の頭が悪くなったら千冬さんのせい。ではなく自業自得だ。

「織斑はまだしも四条。お前はIS学園をなめているのか？」

「勉強と聞いただけでやる気が……いえ、何でもないです」

千冬さんの眼光が一層鋭くなったので自重しておく。

「理解していないのなら言っておくがISは『兵器』だ。理解出来なくとも、そういう物を扱う上での規則は覚えろ。規則は守るためだけのものではない。守る規則が同時に我々を守っているのだ」

至極単純で明確に正しい。郷に入っては郷に従え。IS学園にいる以上、ISについて学ぶのは義務であり当然のことだ。

ボクの考えが足らなかつたらしい。

「分かりました。三日で全て覚えてみせます」

「……ほう、では出来なかつたらグラウンドを十周してもらおうか」

そして、ぎこちなく授業が再開される。

ボクは授業を真剣に聞き、理解するために集中するのだった。

## 厄介事と決闘（前書き）

めっちゃ投稿遅れました！  
すいません！

## 厄介事と決闘

「ちょっと、よろしくて？」

二時間目の休み時間、極度の集中で疲れたボクの耳に、そんな声が入ってきた。多分ボクじゃなくて一夏に話しかけているんだろう、そうあってくださいと思いつつも視線はそちらを向いていた。

金髪にロールがかかった髪に白人特有の滑らかな肌。宝石のように透き通った蒼の瞳がボク達を見ている。高貴かどうかは別としていかにも高飛車なお嬢様、といった感じだ。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど…… どのような用件だ」

一夏が返事をしたのでボクは黙って耳を傾ける。

「まあ！ なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

「……………」

「……………」

予想に違わぬ高飛車っぷりだ。ボクはこういう手合いは苦手…… というより嫌いなので、一夏に任せて教科書を開く。

千冬さんにあれだけの啖呵を切ったのだから出来なかった、では男が廃る。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリス

入の代表候補生にして入試主席のこのわたくしを？」

ISについて何も知らないボクらがそんなこと知っている訳がねえのである。代表候補生って言葉もよく知らないし。

「友歩、代表候補生って何だ？」

「ボクも今一夏に訊こうと思ってたところだよ。オルコットさん、代表候補生ってどういうものだった？」

聞き耳を立てていたクラス的女子数名がコントのようにずっけ  
た。

「あ、あ、あ……」

「「あ？」」

「あなた方っ、本気でおっしゃってますの!？」

オルコットさんの顔は正に鬼の形相。いい睨みっぷりだ。世界を  
目指せるぞ。

「おう、知らん」

「あんまりテレビとか見ないしね」

頭が痛そうにこめかみを押さえながらぶつぶつ呟いているが、よ  
く聞こえない。

「で、代表候補生って？」

「国家代表IS操縦者の候補として選出される者のことですわ」

「つまり、エリートってことかな？」

「そう！ 本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを  
同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し



理解していただける？」

ボク的には貴女に構わないでいただける方が幸運です、とは言えない。

こういう相手は受け流した方が得てして楽なものなのだ。過剰に反応して火に油を注ぐような真似をする必要はない。だが現実とはそう上手くいかないもので

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

隣の織斑君（馬鹿）がどんどん油を注いでくれやがっているのだから、手に負えない。

「ふん。男でISを操縦できると聞いてましたから、少しくらいは期待していたのですが……無駄でしたわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「まあでも？ ISのことではわからないことがあれば、泣いて頼むのだったら教えて差し上げててもよくつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒しましたから」

唯一というところが重要らしい。ところで代表候補生の実力をよく把握していないのだが、教官は本気でやっていたのだろうか？

ボクの場合は開始早々にシールドエネルギーの半分程を持っていかけたが、操縦に少しずつ慣れていき、結局は序盤に削られた分が響いて負けたわけなのだけれど。

「あれ？ 俺も倒したぞ、教官」

一夏の一言に固まるオルコットさん。まあ、あれだけ自慢気に言

つておいて自分以外も倒してました、なんて驚愕以外のなんでもないだろう。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチだろ？」

「あなたはどうですか？」

「ん？ ボクは普通に負けただけ？」

ボクの言葉を聞くと、ほっとあからさまに安堵の溜め息をついている。ISを動かすのが二回目なのだから勝てるはずがない。一夏のは事故で偶然勝ったらしい。

「で、あなたも教官を倒したって言うの！？」

「とりあえず落ち着けよ、な？」

「これが落ち着いていられて」

その時、オルコットさんの追求をシャットアウトするように三時間目の始業ベルが鳴り響いた。

「っ……！ また後で来ますわ！ 逃げないことね！」

非常によくない、よくないのだが何を言っても無駄そうなのでやめておく。無駄なことはしない主義……でもないか。

教壇を見れば鬼教官こと千冬さんがすでに立っている。

「それではこの時間は実践で使用する、各種装備の特性について説明する……が、その前に再来週行われるクラス対抗戦の代表者を決定する」

クラス対抗戦の代表者。つまり、クラス一番の実力者になるもの

だろうか。まあ、ボクではない。

「クラス代表者とは……まあ、クラス長のようなものだ。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

要するに面倒くさい係ということだ。

こういう時の定石は他の人間を推薦することだ。とはいえ、最初に発言しては目立つので最初に名前が出た人間をさらに推薦する。  
パーフェクト  
まさに完璧な作戦だ。

「はい。四条くんを推薦します！」

よし、ボクも四条くんを推薦……ん？ 何かがおかしい。

四条「ボク。単純な方程式だった。ボクのパーフェクトな作戦は開始五秒で崩れ去ったようだ。

こうなったら奥の手しかない！

「はい、ボクは織斑くんを推薦します！」

これぞ奥義道連れ！ ぶっちゃけると一夏を巻き込みたかっただけです。

「お、俺！？ ちょっと待った！ 俺はそんなのやらない」

「他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

立ち上がった一夏の反論をピシヤリと止める鬼教官（千冬さん）。そして何故か教祖様（千冬さん）がこちらに向けて出席簿を振り上げて

「ぐはっ!？」

「よからぬことを考えているようだからな。灸を据えてやった」

女の勘という奴だろうか。これ以上叩かれたら頭がUの形になってしまいそうなので自重することに。

「さて、これ以上出てこないのならこの二人で投票になるがいいか？」

「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

そこで立ち上がったのはオルコットさん。正直騒動の予感しかないのでやめてもらいたい。ボクが言えたことじゃないけれど。

「そのような選出は認められません！ 大体男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

昨今の女尊男卑の影響がここにも。

まあ、ボクは自分に被害がなければ男性がバカにされても知ったことではない。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは当然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

どんどんヒートアップしていくオルコットさん。ますます波に乗っているというか調子に乗っているというか。

ボクとしては一夏がキレないか少し心配になってきた。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で」

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

やつぱりやった。ボクに出来ることはとばっちりが来ないように祈るくらいである。

「あつ、あなた！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？ ……いいでしょう、決闘ですわ！」

「おう、いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

この流れだと一夏とオルコットさんがクラス代表の座を懸けて決闘する、という感じで終わるだろう。

軽く安堵の息を漏らしていると

「で？ そちらの方は何も言い返さないのですか？」

オルコットさんからの挑発が来た。彼女からすればボクもまとめて叩き潰しておきたいのだろう。

特に言い返す必要もないと思ったので無視することにした。

「だんまりですか？ ……全く、見た目通りに根暗な性格ですわね？」

「今なんつったコラア！」

あ。思わず叫んでしまった。

ついでに口調も乱れたけどしょうがない、うん。

クラス全体の目がすごいことになっているけれど、しょうがない。

「いや、取り乱しちゃってごめんごめん。でもさ、そっちが『根暗』なんていうからさあ、思わず怒鳴っちゃったんだよ。見た目通りに根暗？ それは眼鏡かけてるからかい？ 全く見た目だけで人を判断するなんて偏見も甚だしいよ。人間は内面の方が大事だとボクは思うけど。かのナポレオン皇帝も『醜い女は我慢できるが、高慢な女は我慢できない』と言っているし。それに合わせて言うなら、君は正に『高慢な女』だよ。ボクも君のような人は願ひ下げだね」

ふう、まだ少し言い足りないがかなりすっきりした。いい汗かいた気分である。

「なっ！ 貴方もわたくしに叩きのめされたいのかしら！」

「いいよ、乗ってあげるよその挑発。でもさ、男と女の決闘ならハンをつけるべきじゃない？」

「あら、早速ハンデのお願いかしら？」

ボクの発言に少し余裕が出来たのか、オルコットさんは澄まして言い放つ。

「ボクがハンデつけてあげるってことだよ」

「俺もつけるか？」

ボク達の発言の後、一瞬の静寂の後にクラス中から爆笑が巻き起こった。

「織斑くん、四条くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのは昔の話だよ？」

クラスみんなが言いたいことは分かる。ISは世界最強の兵器

だ。そして、代表候補生なんて大層な名前がつけられてるぐらいだから、オルコットさんの操縦技術が高いのも承知の上。

それでも男には僅かばかりの矜持ってヤツがあるのだ。

「分かった。ハンデはお互いになしってことで」

「ふん、当然ですわ」

そこで千冬さんが手を叩いて空気を引き締める。ボクもこんな力リスマ性が欲しい。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナにて行う。それでは授業を始める」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4650w/>

---

IS ~ もう一人の操縦者 ~

2011年11月24日20時53分発行